

財團法人明治聖徳記念學會創立二十五年に

際して 明治天皇の聖徳を讃頌しまつりて詠める

佐伯有義

鳥が啼く吾妻の國、寶田の千代田の里を萬代の都と定め日の本の國平ら
けく知食し天皇命は、天皇の代々を重ねて、御心に思欲めしつ、天下の政
事をば樞原の日知の御代の、古の狀に復して、天地の神を敬ひ、春秋の祭
重みし、朝廷邊に仕ふる官、愛給ひ、悲しみ坐し、四方八面の青人草を撫給
ひ惠給ひて、海外の百八十の國、隔無く交らひませば、谷嶼の狹渡る極み、

山彦の答へむ極み、潮沫の至らむ限、天津日の高き御影を、畏みて服従奉り、綿積の深き恵を、悦びて慕ひ奉りぬ。斯はしも高き尊き、現津神吾大君の、今はしも神去坐して、桃山の底津磐根を、常宮と定給ひて、永久に神留坐し、吳竹の代々木の原に、宮柱太敷立て、萬世に鎮まり坐すを、朝夕に千人五百人、大前に參入額突き、ひれふして、をろがむ見れば、大御稜威、彌畏く、大御蔭、彌尊く、仰がるゝ鳴

反歌

大御稜威高く尊く歲月の離ると共に彌に仰賀流